

事業所名 : グループホーム おらほの家 (別家)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390800092		
法人名	特定非営利活動法人 明成会		
事業所名	グループホーム おらほの家 (別家)		
所在地	〒028-0526 岩手県遠野市下組町11-49		
自己評価作成日	令和7年7月31日	評価結果市町村受理日	令和7年10月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ホームの窓外には野山が見え、住宅街に位置しているため、人の往来や畑仕事を見ることが出来ます。野原には野鳥やキツネ、鹿など野生動物の姿が見え、テラスには地域猫の訪問があります。食事はホールに隣接したキッチンで手作りしております。季節の山菜や家庭菜園で育てた野菜を提供しています。また、調理中の音や匂いを感じてもらうことができ、普通の環境で、普通の生活を送って頂けるようにしております。利用者様一人ひとりにとっての我が家「おらほの家」に近づけるよう日々取り組んでおります。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和7年9月2日

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、釜石自動車専用道路遠野インターチェンジに近く、中心市街地に通ずる主要道路沿いに立地し、自然豊かで閑静な住宅地の中で恵まれた生活環境にある。敷地内に同法人が運営する「おらほの家(本家)」が隣接し、運営推進会議や避難訓練の実施などの協力体制ができています。開設当初からの理念「笑顔あふれる第二のわが家」に込められた思いのとおり、自宅での生活が困難になった利用者が安心して「第二のわが家」で暮らしていけるようにと、管理者、職員がチームワーク良く三食手作りの食事を提供するなど、家庭的な「ふつうの暮らし」を支援している。地域の方々には事業所発行の機関紙「おらほの家便り」を回覧板でお知らせをし、住民からの声かけや野菜の提供を受ける等、その関係性を大切にしている。コロナ禍で停滞していた地域との交流も再開され、今年は久しぶりに地域の祭りに職員9名が参加しました。新たに迎えた外国人スタッフを地域住民に紹介するなど、地域に開かれた親しみやすい事業所として取り組みを進めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる(参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている(参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある(参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている(参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている(参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている(参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている(参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている(参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている(参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている(参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている(参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おらほの家 (別家)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	管理者は、利用者の皆様が自宅で暮らしているように自然に笑い、自由に活動できる環境作り力を投入しており、職員も同様に取り組んでいる。	開設当初に定めた理念「笑顔があふれる第二のわが家」に基づき3か月毎にスローガンを定め、毎月のミーティングや日々の申し送りノートを通じて共有し合いながら、家庭的な雰囲気の中で介護サービスを提供している。毎朝「今日も笑顔で頑張りましょう」と職員全員で唱和し一日が始まっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	コロナ禍以来、参加できていなかった地域のお祭りに、職員が踊りで参加することができた。その際に、外国人職員を地域に紹介する時間を設けていただき、地域の皆様から良い機会であったと声をかけていただいた。	自治会に加入し、地域との関わりを大切にしている。事業所の日頃の様子をお知らせするため、隔月で発行している「おらほの家便り」を回覧板に添付してもらっている。コロナ禍でなかなか出来なかったボランティア交流も少しずつできるようになり、劇団が来所して踊りを披露し、利用者からは大好評であった。また、お祭りに参加し、外国人の職員を地域の方々に紹介する機会も得て、地域との繋がりを再構築出来るようになってきている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	2ヶ月に一度、施設の様子を掲載したお便りを、地域の回覧を通して発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。	運営推進会議では、施設の状況や活動報告、悩みの相談を行い、委員からは助言等を頂いている。頂いた内容は検討し、運営に生かされている。	本家と合同で、隔月で開催している。地域包括支援センター職員、自治会長、民生委員、地域の女性部長等が委員で、事業所からは所長、管理者が参加している。事業所から利用者状況や、行事、新しく外国人スタッフが入職したことなど報告し、委員から様々な質問、意見、助言を得る機会となっている。	運営推進会議は外部の目を通して事業所の取り組みや改善課題を話し合う重要な会議です。会議に家族が参加することで、利用者の日々の生活状況を知っていただき、家族からの意見や要望を聞く良い機会になると考えます。家族にも開催を案内し、会議が充実したものになるとともに、家族の意見が運営に活かされていくことを期待します。

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おらほの家 (別家)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。	運営推進会議等で情報の交換を行っているほか、専門の部署にその都度相談でき、協力を頂いている。	運営推進会議の中で、地域包括支援センター職員を通じ市の行政情報を得るとともに、地域の情報の交換や相談を行っている。外部評価、運営推進会議等の報告や要介護認定申請等の際に、市の担当課に直接出向き、指導や助言を得るなどして、スムーズな協力関係を築くよう努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	徘徊や不穏時は職員が付き添い、玄関の施錠、スピーチロックを含め拘束を行わないケアに職員一同つとめている。	担当職員2名と管理者等による身体拘束廃止委員会が設置されており、3ヵ月毎に開催し結果を職員に周知している。また、年2回身体拘束廃止と虐待防止の研修会を開催し、拘束しないケアの実践に職員全員が努め、特にスピーチロックには配慮している。離床確認のためのセンサーを活用し、居室の戸には鈴を付ける等の対応を行っている。玄関は、防犯のため夜間のみ施錠している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	虐待防止の内部研修を行っている。業務の中でも虐待が起きないように職員間で情報の共有をしている。また、一人の職員に負担がかからないように皆で協力している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	学ぶ機会はあるが、自身での活用の機会はなかなか無いが、支援が必要と思われる方を担当窓口につなぐことができている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	安心して利用していただけるよう、丁寧で分かりやすい対応を心掛けている。また、利用者家族様とは普段から連絡を取り合い、良い関係を維持できるよう努めている。解約に至る際も同様に行っている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おらほの家 (別家)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	ご家族が話しかけやすい雰囲気作りに勤めている。電話や来所があった際は、話やすいようこちらから働きかけている。	職員は、家族が話しやすい雰囲気づくりに努め、気軽に話せるよう働き掛けている。通院同行や面会で来所し、或いは電話連絡の際に家族の意向を聞き対応している。居室担当者が本人の日常の様子を一筆箋に書き記し、毎月の利用請求書と一緒に家族に送付し、隔月で発行している「おらほの家だより」でも普段の生活状況や行事の様子などを家族にお知らせしている。家族からは利用者の姿を知る事が出来て嬉しいと喜ばれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	管理者は職員一人ひとりの要望や、事業に対する意見等を話せる環境作りを行っている。意見や要望を運営側へ繋げ反映できるようにしている。また、運営内容を職員に伝え理解協力してもらえよう努めている。	個人面談は年2回実施されているが、管理者は職員の生活に併せた勤務表づくりなど、日常業務の対話から出てくる要望や意見を大切に考えており、常に話しやすい環境づくりを心がけている。職員から出された研修参加、職員不足等の意見、要望などを運営側にも伝えながら、業務の改善に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	代表者は日常的に職員が話しやすい環境作りに努め、職員一人ひとりの頑張りを認めている。個々の面談を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	キャリアアップ研修や、働きながら資格取得ができるように補助制度を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	管理者が外部研修等に出席した際、外部と交流を持つ。研修内容は職員にフィードバックしている。		

事業所名：グループホーム おらほの家（別家）

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	利用者、利用者家族と面談を行ない、本人の思いと、入居までの様に過ごしてこられたのか聞き取り、入居されてから早く生活に慣れて安心した生活ができるように配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	入居にあたり、ご家族からお話を伺い、ご利用者様にごどのような生活を送って欲しいかも伺っている。入居後も電話等で生活の様子を伝え心配事が無いかなを尋ねている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	ご本人、ご家族様、関係機関に聞き取りを行う他、ご本人との関わりの中で必要なサービスを見極めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	利用者一人ひとりの得意な事や経験が生かせるような場面を、利用者と職員と一緒にできる事の中で作り、教えて頂いたり、手伝って頂いたり手伝ったりと共に支え合う関係を気づいている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	家族へ利用者本人の情報を提供共有し、家族の意向を大切にしながら、安心信頼していただけるように努めている。電話や面会、外出などで家族との時間を大切にできるよう支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	病院や行きつけの場など継続して出かけられるように支援している。	利用者は歳とともに馴染みの人との関係が薄くなってきてはいるが、馴染みの商店や行きつけの場所、お墓参りなどの希望があれば、家族に連絡して来ていただいたり、職員が対応している。携帯電話を所持して外部と交流したり、手紙が届く利用者もおり、入居前の馴染みの関係が維持できるよう見守りながら支援している。利用者の中には馴染みの人が入居した事で、お互い「心強い」と支え合ったりしている。	

事業所名 : グループホーム おらほの家 (別家)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	職員が利用者の輪に入り、一人ひとりが孤立することなく、入居者がお互いを仲間の様に思えるような関係作りに力を入れている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	特養入居や入院などで退所された場合でも、家族から相談を受け支援している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	日々の生活の中での会話や表情から本人の意向を把握するように努めている。利用者から相談を受けることもあり、傾聴し、ケアや支援に反映している。	認知症が進み会話でのコミュニケーションが難しい利用者については、普段の様子をきめ細やかに観察して意向の把握に努め、言葉で意思表示できる利用者からの希望、意向と同様に、申し送りノートやケース記録に記載し職員間で共有し、洋裁の好きな人には裾上げをお願いするなど、やりたい事、出来る事の役割を決めて手伝っていただいている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	本人や家族からの聞き取り、関係機関からの情報提供などで把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	本人と生活する中で現状の把握をし、日々の小さな変化を見逃さず職員間で共有している。アセスメントと毎月のモニタリングを繰り返し、今必要な支援を見極めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	本人の変化などを時間を空けずに家族と話し合えるようにしているので、早い対応が取れている。また、日々の業務やミーティングで職員と意見交換を行い反映している。計画には家族の要望も取り入れており、状態の変化による見直しも定期的に行っている。	モニタリングは居室担当者が主となって行い、日々の業務の中やミーティングを利用し、管理者、ケアマネによる協議を経て原案を作成し、家族への説明と要望や意向を聞き取り、それを反映させてケアマネが作成している。状態の変化によって見直しが行われ、作成後は、家族に説明し承認を得ている。また出来る利用者からは、自筆の署名をもらっている。	

事業所名 : グループホーム おらほの家 (別家)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	個別ケース記録に事実を記録、日誌には一日の変化や、注意事項を記録し、申し送りをしている。これらを使い職員各々が情報を共有する他、口頭でも勤務している同士のリアルタイムな共有をおこなっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	本人が希望することを、その時に対応、提供できるようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	運営推進会のメンバー(自治会長、民生委員、地域包括支援センター)と推進会議を通して、情報や助言を頂き支援に生かしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	できるだけ入居前からの主治医に継続してもらえよう、家族や利用者の希望に配慮しながら、通院介助を行っている。また、往診対応でホームでのワクチン接種や定期受診を受けている。	6名が入居前からのかかりつけ医に、3名が諸事情からかかりつけ医を変更している。家族同行の受診とされているが、難しい時には職員が対応している。受診時には、バイタルチェック表と生活状況を記したものを情報提供している。7名が通院、2名が訪問診療を受診し、職員同行での受診結果は、家族と職員間が共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	日頃の健康管理や身体状況の把握に努めている。体調不良や急変時には連絡し指示をもらう体制になっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院前の様子を情報提供し、病状説明は家族と一緒に受けるようにしている。家族と利用者の希望に配慮しながら早期退院に向けた支援、対応をしている。病院関係者とは日頃から良好な関係を築いている。		

事業所名 : グループホーム おらほの家 (別家)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	契約時に重度化した場合や終末期について家族の意向に沿った支援を心がけている。現在まで看取りの実績は無いが、事業所の方針と家族の協力を得ながら利用者が安心して終末期を迎えられるように取り組んでいく。	入居時に利用者、家族に重度化した場合の対応や看取りについて説明を行い、同意を得ている。看取りの経験はないが、年1回常勤看護師を講師にターミナルケアについての研修会を開催している。重度化が進み、要介護3以上になった場合には、特養の申し込みも可能であることを家族に情報提供している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	定期的な研修を受けて、急変時に対応できるように努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	災害に対する訓練は未だ不足していると思う。食料の備蓄、ガスを燃料とした発電機を設置しているので、10日程は館内の電力を確保できる状態となっている。	年3回火災を想定した避難訓練を計画し実施している。6月は本家と合同で、夜間想定の実施し、8月にも夜間想定で消防署への通報訓練を行った。10月には消防署員の立ち合いによる総合訓練を予定している。ハザードマップで浸水区域となっており、避難先の場所にも不安があり対策について検討中である。備蓄は、1週間程度の食料品と水、10日間程度の電力を確保できる状態となっている。	災害時には職員だけの誘導には限界があり、地域の協力体制が必要で、いざという時に地域住民にも協力いただける様に、運営推進会議の委員を通じるなどして、避難訓練への参加協力と呼び掛けて実践し、災害時の備えを充実していくことを期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	排泄、入浴以外にも、居室での生活も個人の生活を尊重している。入室時や洗濯なども配慮している。	排泄介助は羞恥心に配慮し、自尊心を傷つけないようさりげない誘導や介助を行っている。異性介助に抵抗がある利用者の排泄や入浴介助は本人の希望に合わせ同性スタッフが対応している。利用者個々に合わせ親しみやすい言葉遣いを心掛けており、使い慣れた方言なども織り交ぜながら対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	日頃から、選択と決定ができるような接し方をしている。(入浴、服装、オヤツ時など)		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おらほの家 (別家)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	利用者のその日の様子や希望に沿って対応している。利用者各々のペースで生活できている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	外出時だけでなく、身だしなみを自身で整える機会が持てるよう支援している。馴染みの美容室がある方は利用が継続できるようにし、化粧品なども気に入っている物を続けて使用できるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	利用者から量や味付けの好みを伺いながら対応している。山菜や、野菜等の下処理を一緒に行う。行事の時は一緒に食事をとっている。	食事は楽しみであり、健康な体を維持していくために大切なことという認識に立ち、三食手作りで提供している。献立は、利用者の食べたいものを取り入れながら所長が作成している。職員が手作りで調理し、「食べやすく、美味しく見えるように」配慮しながら提供している。食材はスーパーから調達すると共に、事業所で収穫したり地域の方から差入れされた野菜などを使っている。行事食(誕生会、敬老会)には、利用者の食べたいメニューを聞いて提供し、喜ばれている。利用者は、食材の下準備や配膳等、出来る事を手伝っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	一人ひとりに合わせた形状、量で提供している。水分や補食もこの限りである。本人に確認を取りながら行っているが、確認が取れない方もいるため、その際は様子を伺いながら行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	一人ひとりに合わせた対応をしている。出来るだけ自身で行ってもらい、できない所を支援するようなことも行っている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おらほの家 (別家)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	一人ひとりの排泄リズムを把握している。一人でトイレに行けない方も、トイレで排泄できるように支援している。落ち着いてトイレに居れない方は、自宅でポータブルを使えるよう支援している。	個々の排泄パターンを把握し、さりげない声掛けと誘導をし、トイレでの排泄を促している。入居前はオムツを使用していたが、排せつチェック表を活用しながら適切に誘導介助し、トイレでの排泄が可能になった利用者もいる。布パンツ利用が1名、8名はリハビリパンツを着用し、夜間3名(うち1名は日中も)はポータブルトイレを利用するが、トイレでの排泄ができています。便秘予防のため、ヨーグルトを提供したり、処方された下剤や座薬を使い悪化予防に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	本人の体調を考慮しながら、運動や食事に気を付けている。(毎日の牛乳、ヨーグルト、食物繊維、)		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている。	入浴は曜日が決まっているが、本人の体調や希望、汚染があった場合は入れるようにしている。	入浴は週3回(火、木、土の午前中)を基本としているが、利用者の様子や要望に合わせて入浴を勧めている。入浴を嫌がる利用者には、薬を塗らなければと頼み込んで浴室へ誘導する等、工夫しながら支援に努めている。入浴中はおしゃべりをし、寛いでいる。入浴剤(紫色が好み)を使用し、季節に合わせて、ゆず湯も提供している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	夜間の室温、寝具の好み、管理の他、日中は活動して夜間眠れるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	個人ごとの服薬場情報を把握するようにしている。新たに薬が追加になった場合は職員間で共有し、服薬後の様子確認、効果確認を共有する。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	職員各々が、利用者の好みを把握して支援している。日々の雑談、レク活動、ドライブなどで利用者は気分転換している。趣味(編み物、裁縫など)が続けられるようにしている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おらほの家 (別家)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	職員は、本人の要望を聞きながら、希望を家族に伝え、外出や外泊など一時帰宅、ドライブや外食など家族の協力を頂きながら実現させている。	暑さ対策をしながら、外気浴や施設周辺の散歩、花壇への水遣り、草取りを行っている。年間計画にドライブを計画し、お花見や紫陽花見学、紅葉狩り、白鳥を見に出かけたり、紫波町の産直の案山子見学や「なでる牧場」へ出かけ、うさぎ、ポニー、ヤギと触れ合う機会も作り、喜ばれている。家族に協力を仰ぎ、外出、外泊が出来るよう支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	現在現金を所持している方はいない。預けている事を理解されている方には、支払い時本人の手で支払えるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	希望があればその都度支援している。また職員から電話や手紙をかけるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	施設内に危険な物が無いようにし、自室や共有部分は職員の見守りで自由に動けるようにしている。窓から見える様子を話したり、装飾で季節感を感じてもらえるよう環境を整えている。光や温度に敏感な方もいるので、何がだめなのか把握してストレスをかけないようにしている。	ホール兼食堂にはテーブルやソファが設置され、大きな窓からは、自然豊かな風景を楽しむことができる。横のキッチンからは、食材を刻む音や匂いが漂って来て、自宅で過ごしているような温かさを感じることが出来る。季節感を感じさせる装飾を飾り、壁面には色ちり紙をちぎり貼った絵や活動の写真のコピーを貼っている。利用者は思い思いの場所でくつろいでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	利用者同士が交流できるよう席にしている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おらほの家 (別家)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	本人と相談しながら配置を決めている。	居室にはエアコン、換気扇、カーテン、テレビの端子が備え付けられ、ベッド、布団、衣装ケース、椅子、テレビ、家族写真、趣味で手作りした木目込みの絵などを持ち込み、利用者自身が居心地よく過ごせるようセッティングしている。居室の入り口には、所長手作りのパッチワークで作った名札が取り付けられている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	段差は無く、動線に配慮して椅子や手すりを配置して、利用者が自由に活動できるようにしている。居室に表札をつけたり、トイレ洗面所等場所が分かるように記している。		